
孤独な7

ザックバラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な7

【Nコード】

N0067L

【作者名】

ザックバラン

【あらすじ】

ある日突然人々のなかに、ドラえもんの道具がひとつ与えられ、戦う事を強いられる人々があらわれた。佐々塚伊織もその一人だった。周りの誰が道具をもって、何時襲ってくるのかもわからない。そんな状況で彼はいつたいたいどのように生きていくのか。

プロローグ

家に居ても居場所が無い、そんな気持ちになってしまったから彼は公園に来て居た。別に公園でやる事があつたわけでもなかったのだが、家でじつとして居るよりもいい気がしたのだ。両親がいなくなつて親戚の家にお世話になるようになってまだ1週間しか経つてないが、親戚とはいえ他人の家だ、早速居づらさを感じて逃げ出してきた、早く慣れるしかないのだろうか。

そんなふうにかから出てきて公園の砂場にそつと腰掛けていると、目の前に突然女の子が飛び出てきた。

少女の年齢はだいたい彼と同じくらい、小学3年生前後だろう。

彼女は笑顔で「こんなところで一人で何をしている？」とたずねてきた。

「ぼくはあそんでるんだよ」彼は答えた。

「そうか」

「きみは？」

「私は見ての通りだ」

見ての通りと言われても、砂場に美少女が堂々と立っているだけだ。何をしているかなどは彼にはわからない。

「もう夜だよ、おかあさんが心配しないの？」

「親などいないぞ？」

「ん？ いないの？ そうなんだ、ぼくといっしょだね」

「そうか、お前も居ないのか、お前は寂しくはないのか？」

「んー？ さみしいかな わからないや、でも、そうだね、あそぼう？ 友達になつてくれる？」

「頭が悪そうな喋り方だなあ・・・支離滅裂じゃないか。でもいいぞ、なつてやる、友達」

「ほんとう!？」

「ああ、だからお前の名前を言え」

「ぼく？ ぼくは『いおり』 『ささつかいおり』」
伊織の名前を聞くと少女は満足そうに頷いて、自分の名前を名乗った。

「私の名前、よく覚えておけよ？ 真垣奈々だ」

プロローグ

その日以降、佐々塚伊織と真垣奈々は毎日遊ぶ事となった。待ち合わせは必ず公園の砂場、伊織が一人で座っていると突然奈々があらわれるのだ。どこに住んでいるのかも、ちゃんとした年齢も知らないが、いつしか二人は最も仲のいい友達同士になっていた。

そんな生活は、小学校卒業の日に式が突然来なくなるまで続いた。

朝の部屋

朝、アナログ式の目覚まし時計のジリジリという音に耐え切れなくなり目が覚めた。随分と懐かしい夢をみたいた気がするが、今はもう覚えていなかった。布団を抜け出し、這う様に二度寝防止の為に部屋の反対側に置かれていた鳴り続ける目覚まし時計を止めて、一度大きく体を伸ばした後でふと部屋の中に見覚えの無いダンボールがあることに彼は気が付いた。

必要最低限の物しか置かれず、人工的な静けさや冷たさを感じるような部屋の中心にポツリと居るそのダンボールは、異様な雰囲気醸し出していた。

こんなダンボールを部屋の中央に置いた覚えなどまるで無い彼にとつて、この現象は自分の脳のキャパシティを超えたものだった。だんだん目覚めてきた脳が、この異常性を警告し始め、そこで一気に覚醒する。明らかにおかしいのだ。自分が置いていないものが自分の部屋にあるという状況が。

すると突然チャイムがなった。一瞬跳ね上がった彼は、気を取り直して玄関へ向かった。

玄関のドアに付いている覗き穴（ドアスコープと言っらしい）から外を見てみると、つばが360度全方向に伸びた帽子をかぶった髪の毛の長い人物が立っていた。

「こんにちは」とドアの向こうから声がしてきた。どうやら女性らしいと彼は感じた。

「こちらが佐々塚伊織さんのお宅でよろしいのか？」

「えっと、あつてますが……」

「そう、それはよかったわ、二度も間違えてしまったから。どうやら三度目の正直というのもあながち嘘じゃないようね」

「……はあ」

「あら、ここは笑うところらしいわよ？ 笑わないのね、やっぱりデータなんてあてにはならないってことかしら。これも笑うところね、お前が言うなっていうツッコミでもよかったのだけねど・・・」

「はあ？」

「わからない？ 無理も無いわね。とりあえず、おはようございませ、ワタクシのことはクズとお呼びください」

「・・・はあ？」

「さつきからあなたは『はあ？』しか言わないのね、頭の回転が遅いんじゃないの？ 違うのかしら、頭の回転が鈍いのね。良さそうね、痛みに鈍そうで」

「えっと・・・あなたは誰でしょうか」

「だからワタクシはクズです。二度目です」

この頃にはマシンガンとクとダンボールで混乱していた伊織頭もだいぶ冷静になっていた。

「何のためにここへ？ ダンボールと関係が？」

「いいですね、二回目にその質問を出した人間はなかなかいませんよ。やはりいい感じに頭が鈍感なようだ。シヨックに強い。他の人たちはたいていワタクシを変な人扱いんだ、酷いとおもわないかしら」

このクズという女性、喋るのに毎回毎回ポーズを変える。帽子をかぶった長身の女性が、喋っている最中まるで舞台のように家前で体を動かすのだ。伊織はそんな彼女の常識の無さに驚いた。

「そうです。その部屋の中心のダンボールとワタクシは関係があります。ワタクシが置きました、というか落としました」

「落としました、ですか？」

「そうです。間違っています。しかし今その方法を話しても理解できないでしょうし、次の話題へ行きましょう。そのダンボールを開いてみてください」

「しかし・・・いえ、わかりました」伊織は頭の中で自分の部屋の中心にダンボールを落とす方法を考えてみたが、まるで思いつかなかったため、とりあえず彼女に従う事にした。

「なかなか切り替えが速いですね。流石三番目。いや、マスターによれば一番目らしいのですが・・・」

なにやらブツブツ言っている彼女を無視して、ダンボールを取りに行く。大きさの割りにダンボールは軽かった。

「さて」と呟きながら、ガムテープに手をかけてダンボールを開いていく。中には、ちいさな布切れが入っていた。

「この布切れは？」伊織は未だにブツブツと言っている彼女に問いかけた。

「それはポケットです。それを服につけてくれれば、勝手にポケットになります、しかも中身は四次元ポケット。すごいでしょ！」

このセリフには、流石に伊織もこの女性は変な人だと思ったのだが。

「とりあえず付けてみてください、その布を服に押し当てるだけでいいので」と言われとりあえず服にくつつけてみると、驚くべき事に、ピッタリと布が服に張り付いたのだ。

「さて、とりあえずつけられる事は確認しましたね？ では続いてそのポケットの説明に参りましょう」

この出来事に、完全に脳が麻痺した伊織は、思考を停止させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0067/>

孤独な7

2010年11月24日07時57分発行